気が付けば，非正規雇用で 15 年

不安を愉快に変える処方箋は，いかがですか？

北川妥穂
国立精神・神経医療研究センター図書館

【はじめに】

最初から非正規雇用の働き方を選択したわけではない。経験のない図書館勤務を体験するために，就活の末巡り合えたチャンスが，非正規雇用だった。初めての図書館勤務で感じたことは，職員様との温度差だった。今日まで培ってきたものの，重さが違う。経験の差だけで片付けられない何かがある。何が違うのか。図書館司書としてカウンター業務を遂行する私とは，明らかに何かが違う。その疑問を解決する手段として選んだのが，研修参加だった。

【経　緯】

恵まれた環境だった。ILL で文献複写申込み，論文の取得や，新人研修への参加を，職員様が快諾して下さったことは，今でも感謝している。これがきっかけとなり，勤務のない日や有給休暇を利用して，講習会やセミナーに自費で参加するようになった。

もう一つ，私にとって良かったことは，参加した講習会，セミナーの報告義務がなかったことだ。「研修参加報告書」を提出する煩わしさは，会社員時代の苦い思い出だ。どこへ行こうが，何に参加しようが，交通費，参加費，全て自費である。得た情報，知識の報告義務がないのは，実に愉快だった。束縛されることなく，自分のための教育を，自ら選択して，実行できることは至福の極みである。

図書館司書として研鑽を積むことに，正規も非正規も関係ないと思う。どのようなカタチであろうと，考え方次第ではないだろうか。どういう司書を目指すのか，なりたい司書になるために，何をするべきなのか，探求することに勤務形態は関係ないと思っている。リスクはあるが，束縛のないこの環境を，今となっては手放すのが惜しい。

いつかは正規職員になれると思っていた。そのために，図書館業務の経験を積むこと，研鑽を積むことに一生懸命になった結果，非正規雇用での勤務が現在も続いている。それなりに自由な身分を楽しみながら仕事をしている。非正規雇用はそれでいいと思っている。なぜなら，来年の保証がないから。失職する可能性は五分五分だから。できる今を，精一杯自分のために使う。これでいい。

【終わりに】

就業の保証，収入の安定を鑑みれば，正職員であることが望ましいのは言うまでもない。しかし，非正規雇用だからこそ，出来ることがある。職場の仲間と Give and Take の精神で助け合い，知り得た情報，知識を全て自分のものにしながら，現在に至る経緯をご報告させて頂く。マイナス思考をプラスに変える処方箋にして頂ければ，幸いである。

（※2018 年 3 月看護図書館情報研究会第 7 回研究会の発表を，追加・修正しました。）